信達義民芝居　太郎右衛門

作　清野　和也

九場（１２０分）

一場　観音さまの前で
二場　生きる価値
三場　筵旗と越訴
四場　江戸へ！
五場　百姓だまり所
六場　星のような言葉
七場　見えざるものの裁き
八場　思わざらまし六つの花
九場　語り継がれる信達義民

【登場人物】

佐原村名主　佐藤太郎右衛門
人ならぬ身分の者　シケ
大森代官　岡田庄太夫俊惟（としただ）
太郎右衛門の妻　こう
江戸宿屋主人　白子屋（しらねや）文左衛門
大森代官手代筆頭　木南浅野右衛門
大森代官手代　吉田伴蔵
岡田俊惟の妻　あさ
佐原村百姓　信太
佐原村百姓　斉吉
佐原村百姓　梅
佐原村百姓娘　しま
太郎右衛門の息子　旭芳本瑞（きょくほう ほんずい）
門番（足軽）
捕物・複数
町奉行（声のみ）
寺社奉行（声のみ）
勘定奉行（声のみ）

一場　観音さまの前で

享保十三年（１７２８年）、陸奥国信夫郡・福島天領の佐原（さばら）村にて。この地は、大森代官・岡田庄太夫が治めている。旧暦三月三日（新暦四月十一日）の夜中、春雨。村外れにある「原の観音さま」のお堂の前、木々に囲まれた広場を埋め尽くす筵旗と百姓たち。

一同　おー！！
信太　四日後、三月七日だ！
一同　おー！！
信太　この佐原村、大森の村々だけじゃねえ、川俣（かわまた）の奴らも、陣屋に乗り込むことを決めたそうだ。一斉に訴え出る！二千は集まる
一同　おー！！
信太　一揆を起こす！！
一同　お～～！！！！
信太　太郎右衛門さん！！
太郎右衛門　いまの代官の非道さ、この村の人々の苦しみ。汗水流して働き、それでも生きられない世をおかしいと思っています。ただ、皆さん、どうか忘れないでほしい。決して死ぬためではない。武器はいりません。生き伸びるために皆でお願いに行くのです。四日後、大森陣屋へ！
一同　お～～！！！！

百姓たちは一斉にはける。シケ、それを物陰で見ていて、追って行く。
四日後、同じ観音さまの前。コウがいて、お参りをしている。そこに同じ村の百姓の梅が来て

コウ　雨、雨、雨
梅　コウさん、濡れちゃいますよ
コウ　梅ちゃん
梅　・・・いつもなら恵みの雨。でも、撒く種ももう無いって
コウ　降りすぎればまた荒川が溢れます。・・・梅ちゃんも観音さまにお参り？
梅　はい、どうかうまくいくようにと
コウ　・・・
梅　私も行きたかったな
コウ　一揆に？
梅　斉吉は連れてってもらえたんです。男だから
コウ　私たちは家を守るお役目です
梅　・・・コウさん、しまちゃんも売られちゃったって
コウ　ええ、聞きました
梅　佐原村からどんどん人がいなくなっていく。あの代官のせいで
コウ　梅ちゃん、

梅　わかっています、太郎右衛門さまが、みんながなんとかしてくれる。でもね、私思ってしまうときがあるんです。江戸じゃ今日もノンキに生きてる奴らもいるんでしょ。・・・こんな村に生まれたからだって

熊三泣き出す。コウがあやすとすぐに泣き止んで

梅　熊三ちゃん、太郎右衛門様に似てる

コウ　そうですか？

梅　うん。きっと利発な方になるんでしょうね

コウ　ねえ、梅ちゃん。・・・私、みんなが無事に戻ってきてほしいとお参りに来たんです。一揆がうまくいくようにではなくて

梅　・・・私も。実は、今年こそお腹いっぱいご飯が食べられますようにってお参りに来たんです！原の観音さま、どうか見守っていてください・・・南無大慈大悲観世音菩薩（なむだいじだいひ かんぜおんぼさつ）、南無大慈大悲観世音菩薩・・・

二人祈り終わり、退場

二場　生きる価値

旧暦三月七日。まだ建ってから間もない大森陣屋（代官所）にて。外から「押し入れ～！」と農民たちの怒号が聞こえる。手代筆頭の木南浅野右衛門がその声に気づき、手代の吉田伴蔵に話しかける。

木南　吉田、吉田、吉田！！百姓の中でも誰か話がわかるものを呼んで来い・・・佐原村の太郎右衛門は来ていないか？

吉田　はっ（舞台袖に向かい）太郎右衛門を連れて来い！・・・まさか百姓ども、一揆を起こすとは

木南　お代官様がいないときに！

吉田　困りましたね

木南　どれくらいいるんだ？

吉田　二千はいるかと

木南　なに！？・・・くうう、いいか、吉田、これは一揆ではない！

吉田　は？

木南　これは一揆ではない！！お前も言え！

吉田　いや、一揆です

木南　一揆ではない！

吉田　・・・木南様、太郎右衛門が来たようです

木南　来たか！・・・信達（しんたつ）三十五ヶ村がうち、佐原村の百姓代、佐藤太郎右衛門！前へ！

呼び出される太郎右衛門

太郎右衛門　木南様
木南　太郎右衛門、ずいぶんと表が騒がしいようだが
太郎右衛門　皆でお代官様にお願いにまいったのです
木南　願い？
太郎右衛門　信達三十五ヶ村の百姓に代わり嘆願（たんがん）させていただきます。昨年の長雨・大水で田畑は凶作、自分たちが食べるものさえままならない有様です。何卒、ご慈悲により、種もみと食料をお貸しいただき、百姓仕事を続けられますようお救いください
木南　その件はもう願い出でないと、名主（なぬし）どもが証文（しょうもん）も書いたであろう。そうだろう、太郎右衛門
太郎右衛門　同時に木南様はお代官様に話してくださると
木南　いずれ沙汰を出す。今日のところは帰りなさい。さ、皆を連れて、な
太郎右衛門　今日は答えをもらうまでは帰りません。表の二千の百姓たちも同じ思いです
木南　太郎右衛門！！
太郎右衛門　妻子を売るもの、餓死するものすら出ています。いかがするおつもりか！
木南　ですから、ですから、お代官様にですな
太郎右衛門　お代官様はいつもお江戸にいるのでしょう！このまま村々が立ち行かなくなれば、木南様が責を問われるのではないですか
木南　この木南が悪いと！？
太郎右衛門　百姓たちは口々にそう言っています。遠くお江戸のお代官様には見えずとも、木南様はわかるはず！どうか御慈悲を。お代官様に木南様より強く！
木南　・・・よーし、よしよし、百姓達に伝えてくれ、太郎右衛門！この木南はお前たちのことを本当に、本当に思っている。もちろんお代官様にも話をした
太郎右衛門　お代官様はなんと
木南　実はな、知恵を授けてくださったのだ
太郎右衛門　本当ですか！
木南　うん。例の御膳を持ってまいれ

売られた娘・しまが太郎右衛門の前に膳を出す

しま　太郎右衛門さん！
太郎右衛門　しま！どうしてここに
木南　知り合いか。よく働く娘だ、下がりなさい
しま　はい・・・
太郎右衛門　佐原村の百姓の娘です。どうしてここに。売られたと聞きましたが
木南　すべてはお代官様の指図。我々に知る由はない！さて、そちらの御膳
太郎右衛門　・・・これは？
木南　馬小屋のワラに、米ぬかを混ぜたものです。なるほど、ワラであれば、村に

もいくらでもあろう

太郎右衛門　木南様

木南　お代官様に言われ、色々と試してみましたが4対6の割合が一番良いようです。ワラが足らぬようであれば、陣屋にもあるぞ。持っていきなさい

太郎右衛門　人は、ワラだけでは

木南　まあ、腹は満たせる、死ぬことはない。日本中が飢饉（ききん）のこの時に、なんとか信達の百姓に生きてもらおうというお知恵

太郎右衛門　これだけでは生きられません！

木南　それなら死んでも構わないと

太郎右衛門　今、なんと（じっと睨みつける）

木南　そう、お代官様が言っておられました

太郎右衛門　・・・それでは我々は一揆を起こすしかありますまい

木南　太郎右衛門！

太郎右衛門　他に道なし。門を開き、百姓たちをここに引き入れます

木南　待て待て、悪いのはお代官様だろう！

太郎右衛門　ここは陣屋、代官所です。・・・木南様、何卒、もう一度お代官様に！！

木南　あ、ああ、わかった！

影で聞いていた吉田が足軽たちと出てきて

吉田　太郎右衛門。手代筆頭にその物言い、許されるものではない！捕らえよ！

捕物たち、太郎右衛門を囲み捕らえようとする。避けることはするが、決して相手を傷つけようとしない太郎右衛門

吉田　生きて返さずとて良い！

木南　吉田！

吉田　討ち入りに来たものを返り討ちにしたと言えば良い

一斉にかかる兵たち。そこにシケが現れて、太郎右衛門を救い出す

シケ　大丈夫か？

太郎右衛門　シケ！？来るなといっただろう！

太郎右衛門、しまの元へと駆け寄り

太郎右衛門　行くぞ、しま！

シケ　太郎右衛門！！

しま　（首をふる）

太郎右衛門　共に帰ろう。佐原へ。家へ！（手を取る）

しま　嫌です・・・！

太郎右衛門　しま・・・？
しま　ここにいると・・・飯が食えます。死ななくていいんです。これ・・・買ってもらったんです、櫛、これ・・・
太郎右衛門　・・・
しま　どうか連れて行かないでください。太郎右衛門さん・・・お願いします・・・
シケ　お願いします・・・
置いていけ。太郎右衛門

太郎右衛門、シケと共に逃げる

吉田　追え！
木南　良い！ 2千だぞ！？怖い！ 逃げたのなら追うことはない。門を固く閉じておきなさい

捕物が入ってきて

捕物　代官所を囲んでいた百姓たちが、引き揚げていきます
木南　ずいぶん早いな
吉田　木南様、お代官様には
木南　なに、引き揚げたのなら言うこともあるまい。内緒にしよう

木南はける。吉田ひとり残り岡田に文を書く

吉田　お代官さまへ。手代、吉田が急ぎ筆を執ります。大森陣屋付きの三五か村の百姓たちが一斉に蜂起いたしました。陣屋に来た百姓に、手代筆頭の木南様が百姓たちは藁を食えだの死んでもいいだの・・・

大森陣屋より届いた文を大森代官・岡田庄太夫俊惟は妻のあさと読んでいる。

岡田　ええい、馬鹿者が！！酒の席の戯言だろうが！
あさ　旦那様、
岡田　無能が！なんとかしろ・・・自分で撒いた種・・・！
あさ　旦那様・・・どうしました？
岡田　信達で一揆だそうだ
あさ　まぁ、あちこち物騒ですねえ
岡田　あさ！普通、言うか！？腹すかせた百姓を目の前に藁（わら）を食えだの、死んでもいいだの！！
あさ　さあ、どうでしょうねえ
岡田　さあって・・・
あさ　誰かが言ったのですか？
岡田　木南だ。大森の手代筆頭の

あさ　ああ、よくお菓子を持ってきてくれる。良い人ですね
岡田　・・・お前は・・・いつもそうやってぼーっとして
あさ　そうでしょうか？
岡田　まあ、良い。それで救われているところもある
あさ　嬉しいお言葉ですね。あ。そうだ、
岡田　なんだ
あさ　お腹が空いているのでしたら、お米を売ってあげればいいのでは？
岡田　・・・それを買う銭が無いのだ
あさ　どうしてです？
岡田　働きが足らないからだ。死ぬ気で働き、年貢を国に納める、国が豊かになる。さすれば百姓共にも余裕が出来るであろう。国は人だ！人がお上の為に働かなければ
あさ　旦那様、すこし優しくしてあげたらいいのでは？一揆が起こるのは、政が悪いせいだと、女中たちが言っておりました
岡田　誰だその女中は！
あさ　あら、どの女中でしたかね・・・？
岡田　あさ。良いか、俺はお上が定めた通りに政を行っているのだ。父上が吉宗公にも評価されていたのは、そこに尽きる。良いか、そんな働きが足りぬ、当たり前に出来ぬ者が多すぎるのだ。決まったものを決まったように納める！それで耐えきれず一揆を起こすなど！
あさ　はい、旦那様は、ご立派ですよ
岡田　・・・九郎左衛門は、元気にしているか？
あさ　ええ、今日も剣術に勉学に励んでおりました
岡田　そうか。あいつも立派な武士になってもらわねば。という訳でだ、あさ、明日、行くぞ。信夫へ
あさ　どうかお気をつけて
岡田　・・・あさは行かんか？
あさ　ええ？
岡田　そうか。しばらくお前に、子どもたちに会えなくなるのが残念だ
あさ　ええ、ほんとうに
岡田　ちゃっちゃと鎮圧してくる。よく留守を守れ
あさ　はいはい

三場　筵旗と越訴

旧暦三月十二日、福島藩・五老内町の街道の両脇に、大森代官所付きの百姓たちが座り込んでいる。福島市史によれば「百姓居所は町の内より五老内の辺、海道（街道）の左右にみちみち、旅人おどろき申すほどに御座候。直訴状によれば九日より十二日まで、まかり在り候えば、餓死申すべきていの者、

多く相見え申し候との有様。」
そこに江戸の宿屋の白子屋が通りかかる。白子屋は、町の内から百姓たちの人数を数えてきた様子。

白子屋　・・・千百十六、千百十七・・・
信太　おう・・・なんだおめぇは
白子屋　（信太を数えて）千百十八
信太　なんだって聞いてんだ！！
白子屋　福島の城下からここまでずっと、両脇に百姓たち。いやあ、驚いた。数えてみたら千と百と十八人・・・
信太　・・・こんなときに、のんきに酒なんざ飲みやがって
白子屋　のんきにだあ！言っとくがな、おらあ、大事な娘をこんな片田舎の福島の冴えねえ男に嫁にやって・・・やりきれねえ・・だが仕方ねえ・・・仕方・・・ねえんだ・・・おう・・・・！！俺の気持ち、わかってくれるよなぁ・・・
信太　知るか！
白子屋　なんだと！

白子屋が信太をどつくと、信太はフラフラとと倒れてしまう。

白子屋　へ？なんだ、お前、でかい図体して、力がねえやつだな
信太　・・・
白子屋　いや、すまねえ、そんな強く押したつもりはなかったんだ（手を差し伸べる）
信太　（手を取らずそのままへたり込んでしまう）
白子屋　なんだ・・・そのよ、お前さんたちが何を待ってるのかなって。あれかい？なんか祭りでもあるのかい？ワッチもちょくら見てくかね
信太　江戸の人か
白子屋　おう、俺は白子屋（しらねや）文左衛門。宿屋をやっている。下谷（したや）長者町二丁目だ。江戸に来た際は立ち寄ってくれ。待ってろ、今書いちゃるいや、いい。江戸に行くことなんてないだろう
信太　なんだ、なんだ、つまらねえ話だ。でっけえユメェ持たなきゃならねえぞ、
白子屋　人間に生まれついたからにゃ、ユメェ見んだ！
信太　明日死ぬかもしれない人間にそんなことが言えるか。あんたが今日見てきた人たちはそういう人たちだ
白子屋　どういうことだ、そりゃ
信太　大人しく帰りな

そこに斉吉、続けて太郎右衛門が戻ってきて

信太　信太さん！
斉吉　斉吉、どうだった
信太　バッチリだよ、さすが太郎右衛門さん！
斉吉

白子屋　千百十八、千百十九
太郎右衛門　福島藩の奉行の池田さんという人が会ってくれました。こちらの話は聞いてくれた
信太　それで
太郎右衛門　佐原村は天領の村、福島とはお国が違う。この訴えはご法度、村に帰るようにと
白子屋　えっ
斉吉　だけどそこで太郎右衛門さんが言ってくれたんです。村に帰れば代官からどんな罪を受けるかわからない。福島よりお上に話を通してくださるまで、決して我々はここから動かないと！
太郎右衛門　急ぎ江戸に使いを送ってくれました。良い報せが来るといいのですが。
斉吉　あと、今日の夕方から、福島藩で炊き出ししてくれるって！さすがは仁君（じんくん）・板倉様！
太郎右衛門　明日から信夫山の麓に、雨風をしのぐ小屋もつくっていただけるそうだ。お上からの報せを待ちましょう
信太　・・・俺たちが食えねえのも、野風にさらされるのもどうでもいい。村はどうなるんだって聞いているんだ
太郎右衛門　あとはお上がどう思われるかです
信太　おい、なんだそれは！
白子屋　おーーい、おいおいおいおいおいおーーーい。何だお前たち！
太郎右衛門　この人は
白子屋　白子屋文左衛門だ、下谷長者町二丁目だ。江戸に来た際は立ち寄ってくれ。待ってろ、今書いてやる、千百十九番くん
太郎右衛門　佐原村百姓代の太郎右衛門です
白子屋　これはご丁寧に。って、ちょっとちょっとちょっとちょっとー
太郎右衛門　なんでしょう
白子屋　さっきから話聞いてりゃ、越訴（えっそ）って話だろ！？違法行為ですよ～！下手すると死ぬぞ！！こんな大勢・・・千百十九人でやるか！？
一同　・・・
太郎右衛門　・・・そのとおりです。陣屋から出て、何も言わずにここまで来てしまった。一度、皆さんに聞かなければいけないと思っていました
信太　ああ、そうだな。理由も言わずに福島に連れてこられて、また答えを待てだ？なぜ、あのとき俺たちを陣屋の中に通さなかった。陣屋の侍連中を、あの陣屋をぶちこわしてやればよかっただろう。太郎右衛門！！！
太郎右衛門　あの侍たちの命を奪えればよかったか。みなで討ち入り
信太　そうだ！こんなところで野垂れ死ぬよりよっぽどマシだ
太郎右衛門　その先はどうなりますか？この一揆に参加した村すべてが公方様に逆らうことになる。言ったはずです、生きるために戦おうと！
信太　俺たちはな、すべて覚悟の上で立ち上がったんだよ、お前と違って！！
太郎右衛門　気持ちはわかりますが
信太　わかるわけねえだろうが、お前に

斉吉　信太さん、
信太　俺たちが飢え死にしてもお前は生き残るだろう。家に銭も、米も、おまけにお前には学がある
太郎右衛門　この村の人々をもうこれ以上、殺させやしません。
信太　いいか、覚えておけ。天から殺されるんじゃねえんだ。不作だ、大雨だ、洪水だ、やり切れねえが仕方ねえ。だが、人間様に殺されたら涙も出ねえんだ。代官だ、お上だ・・・。だが、敵わねえ、敵わねえのもわかっちゃいるが、いっそこのまま野垂れ死にするくらいなら
太郎右衛門　・・・信太さん、私は、息子に熊蔵に剣を託せない。命を奪えと言えません。
信太　信太さんには、その覚悟はあるのですか？
太郎右衛門　ある
・・・偽りのない言葉か

そこにシケが現れて

シケ　お前たちだけではない。お前たちの子ども、孫も、その孫も、ヒトではなくなる。良いのか
信太　おい、そいつは！
太郎右衛門　私が呼んだんだ、話をして欲しくて
信太　近づくな、汚らわしい、
シケ　お前たちも、俺と同じになる
信太　俺達の村の話に、人間でもねえ奴が首を突っ込むんじゃねえ！
斉吉　聞いてください、
信太　斉吉！そいつは
斉吉　聞いてください。俺、聞かせてもらったんです、だから！
信太　・・・
シケ　ヤマトの国に逆らって、滅ぼされた一族がいた。ヤマトとは違う神様を祀っていたそいつらは、ヒトではなくなった。遥か昔の話だ。だが、クボウサマの世の中になっても、その末裔はヒトではないといわれ続ける
太郎右衛門　・・・本当にこの国に戦をしかける覚悟はあるか。それを未来永劫続けていく覚悟があるか？
信太　・・・
太郎右衛門　信太さん。今年だけでない、来年も、十年後も、いや、もっとはるか百年後の人々にも、この村の稲穂の実りに喜ぶ秋が来るように、種まき桜を見上げる春が来るように。どうか今は真っ当に江戸からの便りを待ちましょう。
信太　百年後に、佐原村があるもんか
太郎右衛門　生きていれば必ず叶います。・・・もし色好い返事がなければ、次の手もあります。お願いします。お願いします・・・！
白子屋　男じゃねえか、兄ちゃん！そうだぜ、あんたら、今死んじゃダメだ。憎いやつがいるなら、生きて見返してやれよ。ションベン引っ掛けてやる覚悟を持ちやがれ

信太　余所者が首をつっこむな
白子屋　へえ、すいません
信太　・・・っけ。おう、炊き出しはどこでやってる
斉吉　連れていきます

信太、斉吉はける

白子屋　兄ちゃん、江戸からの便りだって、お前らの越訴を咎めるものかもしれねえぞ
太郎右衛門　そのときは江戸に登り、公方様に直訴します
白子屋　それこそ打首は免れねえぞ！
太郎右衛門　公方様に解っていただけるよう言葉を尽くします
白子屋　元より命かけてやる覚悟か
シケ　太郎右衛門は、殺させやしない
太郎右衛門　シケ
白子屋　そうか。良い相棒を持ってるな、あんた。どれ俺もちょっくら炊き出しに行ってくるかな
太郎右衛門　炊き出しは、信達の
白子屋　硬いこと言うんじゃねえ！

白子屋はける

シケ　俺たちの一族は弱虫だ。一度負けたあとは、もう立ち上がらなかった
太郎右衛門　・・・・
シケ　武器はあった。猪を狩る、熊を狩る、命を奪う力はある。だが、そうしてこなかった。ヒトと争うことは禁止されてきた
太郎右衛門　私はお前たちの一族の誇りを素晴らしく思う
シケ　太郎右衛門は甘い。そうして俺たちは長い間、変わらなかったんだ。えらい奴らは倒してしまった方が良い
太郎右衛門　誰も傷つけることもなく変えてみせる。・・・シケたちのこともだ
シケ　命をかけてか？
太郎右衛門　死ぬつもりなんかないさ
シケ　太郎右衛門は、死ぬということをわかってないんだ。だからそんなに簡単に言える
太郎右衛門　・・・
シケ　死んだら、なにも無くなるんだ。誰の中からも、じわりじわりと消えていってしまうんだ。俺たちが今、生きていることだって、本当のことだったのか、幻だったのか。きっと誰にもわからなくなるんだ。太郎右衛門、死ぬとはそういうことだ
太郎右衛門　心配をしてくれているのか？
シケ　しんぱい・・・？

太郎右衛門　・・・ありがとう、シケ。お前たちの信じる星神さまのことはよく知らないが。命を奪うような激しさは、星空には感じぬ
シケ　俺はお前に、死んでほしくないだけだ
太郎右衛門　星など見上げたことがなかった。あの日、シケに教えられるまで
シケ　百姓たちは、昼間耕すから、夜は早く眠る。星を見るのは偉い奴らか、俺たちのような、何も持たない奴らだけだ
太郎右衛門　今日もあの星は変わらずあの場所だ
シケ　天津甕星（あまつみかぼし）。俺たちはあの星神さまを変わらず信じ続ける。イケナイコトか？・・・なぜ、信じていただけで、人ではなくなったんだろう
太郎右衛門　シケは、人だ
シケ　・・・なにか変わるんだろうか、太郎右衛門。立ち上がったら
太郎右衛門　変えるんだ。さあ、シケ、俺たちも腹ごしらえだ
シケ　俺は・・・
太郎右衛門　行くぞ
シケ　わかった

シケ、太郎右衛門はける

四場　江戸へ！

旧暦四月四日、二本松藩の六百人を超える警備とともに、「おびただしき軍陣のてい（直訴状より）」で大森陣屋に代官岡田が到着する。木南が出迎えて

木南　お代官様、ずいぶんお早い到着で
岡田　二本松の丹羽が兵を貸してくれた。七百近く、鉄砲は二百。このまま警護にあたらせる
木南　随分突然のこと、
吉田　すでに受け入れの用意はできております
木南　吉田
吉田　二本松より連絡がありましたので。木南様の手を煩わせることもないでしょうから
岡田　百姓どもは？福島の板倉ぼっちゃんの所に行ったらしいが
木南　お上より農民退去の命令が出たとのことでそれぞれの村に戻りました。百姓共は、ようやくお上に声が届いたと喜んで帰ったようですがめでたい奴らだ。その後は？
岡田　といいますと
木南　百姓はどうした
岡田　いえ、
木南　何もしていないのか！！こんなことになりながら

木南　お代官様が生かさず殺さずとよく申しておりますので、今回もそれでいいかと！

岡田　甘すぎる！吉田

吉田　百姓どもの頭を割り出して、潰す

岡田　どうやって調べる

吉田　疑わしきものを、ここに

岡田　甘い！！もう二度と一揆など起こせぬようにしなければならない。いいか、天領で一揆を起こすということはお上への明確な翻意！決して許すな。木南！大森付き三十五か村の百姓を一人残らず連れてこい！

木南　はは！

岡田　川俣も同じように行なえ。さっさと、終わらせるぞ、ええい、鉄砲をもってこい！俺が見本を見せてやる。急ぎ百姓共を捕らえよ！！

場面代わり舞台上、百姓たちが武器を持った兵たちに追われている。次々ととらえられていく百姓たち。信太は抵抗するが敵わず討たれそうになる。そこに太郎右衛門、シケが現れて

太郎右衛門　やめろ！！

岡田　おうおう、これはこれは！上様に逆らうものどもが、どんな奴らかと思っていたが。やはり、人には見えぬものばかりよの！！畜生のごとき汚らしき身なり！

信太　誰だ、お前は！

木南　この御方こそ、信達天領の御代官・岡田庄太夫様である！！

信太　お前ェが・・・！

太郎右衛門　お代官様！これは一体どういうことでしょう！？我々、代官所付きの三十五か村、お上の沙汰を待っておりました。救われることを信じ

岡田　そんな約束、お上がしたか！？お上に声が届けば、自分たち百姓は、救われるとでも思っておったのか？・・・捕えよ！

太郎右衛門　お代官様、どうか村の様子をご覧ください。田畑荒れ果て、力のない老人、子どもは虫の息！

岡田　老人、子どもは死んでも良い。役にも立たぬモノだろう

太郎右衛門　いま、なんと

岡田　よいか、百姓ども！お前たち百姓が生きていられるのは上様のおかげ。たとえ天変地異にあおうとも、肉を削り、骨をしゃぶり、血をしぼりて、お上に差し出すのが上納（じょうのう）の米。これすら出来ぬは人ではあるまい。家畜のごとくワラでも食えばよろしい！！

太郎右衛門　お代官様！！

岡田　捕えよ

信太　やっぱりこうなったか

太郎右衛門に群がる兵たちに百姓たちが食らいつき

信太　太郎右衛門！早く行け！！

太郎右衛門　！？

信太　次の手あんだろうが！

斉吉　江戸に直訴に行くんでしょう！

太郎右衛門　なぜそれを

斉吉　白子屋さんが言いふらしていました

太郎右衛門　白子屋！！

信太　お前に俺たちの村の百年後の命まで預けてやる。・・・これ持ってけ。僅かだが、村の奴らから集めた銭だ。旅銀にしろ

太郎右衛門　・・・必ずや！

岡田　逃がすな！百姓どもを一匹残らず逃がすでないぞ！

信太　百姓舐めんじゃねぇぞ！！

太郎右衛門、シケはけようとするが、そこに吉田

吉田　ひとりも逃しません

白子屋　あ、ちょっと待ったあ！！

吉田　なんだ、お前は

白子屋　この男、うちの宿の婿養子にもらうことになってね、今、江戸に帰ろうと思っていたところなんだ。なあ、太郎右衛門くん

太郎右衛門　白子屋さん

白子屋　お義父さんと呼びなさい！

太郎右衛門　いや、

白子屋　ということで、この男は村とはもはや無関係です。一揆にも関与していません。それでは、いざ、江戸に帰るぞ～。太郎右衛門くん！

吉田　・・・

白子屋　お義父さんと呼びなさい！

太郎右衛門　お・・・お義父さん

吉田　陣屋に乗り込んできた男が、無関係とは言えないでしょう！

白子屋　くらえ、唐辛子目潰し！！行けっ、シケっ！

シケ、吉田を強襲し、その隙に三人逃げ出す

吉田　くっ、追え、追え！

舞台上では、やはり捕まってしまう百姓たち

信太　頼むぞ、太郎右衛門・・・！

場面代わり、道中。太郎右衛門、シケ、白子屋がともに、次々と襲い掛かる追手たちを追い払っていく

白子屋　待った、待った待った・・・いや、もう疲れた、マジ無理
太郎右衛門　・・・白子屋さん。なぜあなたまで・・・？
白子屋　おいおいおいおい！二十日間、一緒に座り込みした仲じゃねえか！そのあと、佐原村でグダグダしてたら、なんだ、このざまは！！！おい！
太郎右衛門　いや、ですから、そもそも
白子屋　なぜ手を貸すかって？お前さんが、俺の若い頃に似てるからだな
シケ　嘘だ
白子屋　なんだ、この野郎
シケ　太郎右衛門。怪しいぞこの男。岡田の手先ではないのか
白子屋　違ぇよ、バカ
シケ　・・・斬っても良いか？
白子屋　おうやるか、この野郎！
太郎右衛門　元気そうだ。先を急ごうか
白子屋　いいか、真面目な話だ、太郎右衛門。お前さん、お上jに直訴ってんなら、籠訴か箱訴か。どちらにしても訴状には、宿屋の添え書きがいる。どの宿にいるかわからなければ、奉行所が呼び出すこともできねえからだ。・・・江戸についたら、うちの宿に泊まるといい
シケ　結局、商いのためについてきてるのか！
白子屋　うるせえな！直訴に手を貸す宿なんざ、そうそう見つからねえ。俺と共に行くのが一番早いってことだよ！！
太郎右衛門　わかった、そうさせてもらう
白子屋　おう。まあ・・・このままじゃ、江戸に付く前に兵に殺されちまいそうだけどな・・・。すげえ追手の数だ
シケ　・・・太郎右衛門。なぜ、街道を通る？
白子屋　良いこと教えてやろう。オレたちは江戸に向かっている。この道を真っ直ぐ行くと江戸に着く。それが街道というものだ。だから、ここを通っている。どうだ勉強になっただろう！
シケ　太郎右衛門。こいつをおいて山道を通ろう
太郎右衛門　シケ、江戸への道がわかるのか？
シケ　星神さまが教えてくれる。信夫でなくても、星は見えるだろうか？
太郎右衛門　ああ、見えるはずだ
シケ　ならば、大丈夫だ
太郎右衛門　頼めるか
シケ　ああ
白子屋　おいおい、山道って危ねえだろ・・・！？おいおーーい！！

不気味な獣たちの声。必死に向かう太郎右衛門たち。はける

五場　百姓だまり所

旧暦四月二十日。ところ変わって大森陣屋。縄で繋がれた信太、斉吉

木南　お前たち！今回の一揆の首謀者を言え
信太　俺たちは勝手に集まっただけだ
木南　いい加減にしておけ。悪いようにはしないから、な！

そこに吉田に連れられ岡田がやってきて

岡田　木南！今すぐ、縄をほどけ
木南　お代官様！
岡田　お前たち、腹を空かせておったのだなぁ

そういって斉吉の手を取り立たせる岡田。しまが持ってきた米の包みを開け、百姓たちに渡す。兵士たち、吉田の目配せではける

斉吉　姉ちゃん！
しま　斉吉！
木南　とっとと去れ！
しま　はい・・・

しまはける

岡田　お前の姉か？
斉吉　・・・はい
岡田　そうか。あの娘は陣屋で幸せに暮らしているぞ。・・・このたびの飢饉、江戸でひどく胸を痛めていた。吉田に詳しく話を聞けばあまりにお前たちが不憫でな。必ずなんとかする。ともにこの困難に立ち向かおうではないか
吉田　その米は、お代官様からの御慈悲です
岡田　僅かではあるがお前たちに

頭を下げる斉吉　信太は受け取らない

岡田　頭を上げよ
吉田　証文に判を押せ。受け取った証文だ
岡田　判を押したものは帰っても良い
斉吉　信太さん・・・
信太　・・・好きにしろ、斉吉

斉吉、判を押し立ち上がる

岡田　時に、佐原村の太郎右衛門という男の行方が知れぬが。お主、何か知らんか？
斉吉　もしや、江戸に向かい直訴だとか
岡田　それはー
あの男は信用ならぬ男であるなぁ。なあ、木南。あの男がこの陣屋に来た時、食いものを分けてやったのだろう。それがお前たちの元にいっていないか・・・？
斉吉　いや・・・そんな・・・
岡田　のう、木南？
木南　僅かですが確かに与えています。どれだけお代官様が百姓たちのことを思っているかを伝えました
岡田　それにもかかわらず。なぜこのようなことになったのか。お主、知らんか？
斉吉　・・・
岡田　隠しておくと、良いことはないぞ？あの男は、この村を見捨てて逃げたに違いない。のぉ？
斉吉　太郎右衛門さんがそんなこと！
岡田　先ほどのお前の姉も。見捨てたのだろう。代官所に一揆に来たのではなかったか・・・？なぜあの佐原の娘、なんと言ったか。代官所にいる、
木南　しま、ですかな。確かあのとき太郎右衛門とも顔を合わせているはずですが
岡田　もし、ほんとうに太郎右衛門が村を救うというなら、なぜ連れ帰らなかったのだろうな。娘一人、救うのが難しいことか？
木南　まったくです
岡田　かわいそうに。木南、あの娘には特別手厚くしてやれ
木南　はい
岡田　太郎右衛門がもし、直訴をすれば。この村に御公儀から調べが来るだろうよ。その時に、今の話をしてほしい。・・・ひとつ覚えておけ。私たちは、お前たちを簡単に牢につなげる。お前たちの家族も、この村に住むもの、この国に住むものの命は俺たちが預かっている。さ、よく考えて答えよ。米は、いらんか？　餓死するか？
斉吉　わかりました。あの、姉ちゃんのこと
岡田　わかった。代わりにしっかりと、その旨を伝えよ！米が欲しくば、命が惜しければなぁ！　かえって良い

斉吉はける。

木南　お代官様。この者は
岡田　二本松の牢につないどけ。
木南　すぐに江戸に兵を？
岡田　百姓の首は、百姓に絞めさせる。上様に直訴となれば、奉行所預かり。良くも悪くも、奉行所はよく調べる。すぐにこの村に密偵が来よう

吉田　先程の米、
岡田　奴らが納めた年貢だ。俺の米なわけがない
吉田　うまく帳尻を合わせます
岡田　傑作だ！太郎右衛門は、百姓どものために、命賭して嘆願せしが、その百姓どもはほんの少しの、それも自分たちが作った米をありがたがって俺になびく。少しばかりの信じる輩は、牢の中で死を待つのみ
吉田　さすがはお代官様
信太　・・・ろくな死に方しねえぞ
岡田　だとすれば、野垂れ死ぬお前ら百姓共はどれだけ悪いことを重ねているのだろうなあ！俺はお前らよりも生き延びる、確実にだ！おう、言うことの聞かない奴らは牢屋にぶち込んでおけ。俺は、江戸に帰る！
木南　もう帰られるのですか？
岡田　文句あるか？
木南　いえ
岡田　忙しい身なのだ、吉田、あとは任せる
吉田　はっ

岡田はける
所変わって旧暦四月江戸へと向かう道中の三人

白子屋　おい、少し休まねえか・・・？
シケ　太郎右衛門。やはり、おいていこう。こいつは
白子屋　おいいいい、ひどくねえ！？それ
太郎右衛門　・・・いや、シケ、すまん。俺も少し休みたい
シケ　・・・そうか。なら休もう
白子屋　おいおいおいおい、俺と扱いが違いすぎないか！？・・・はあ、腹減ったなぁ・・・。何日食ってねえんだ。お、そのキノコ食えるか？
シケ　食ってもいい
白子屋　お、やった
シケ　ただ、腹を壊す
白子屋　うげえ・・・おせえよ・・・
シケ　太郎右衛門、大丈夫か・・・？
太郎右衛門　・・・情けないな
シケ　どうした？
太郎右衛門　・・・たった数日、飯を食っていないだけで、こんなにも辛いとは。・・・俺は恵まれていた
白子屋　なんだそりゃ
太郎右衛門　・・・名主の家に生まれ、食うものに困ったことはなかった。村が飢饉でも家には米があった。そうか・・・空腹とはこんなにも苦しいものか。・・・村の者が言っていたことがよくわかった
白子屋　良かったじゃねえか。これから、直訴しようってときに、それを知っていて

太郎右衛門　・・・そうだな。佐原村だけでなく、日本中に同じように食うものも食えない人がいるのだろう。なんとか、しなければ。・・・さあ進もう
シケ　山道は歩きなれていないと辛い。足を取られないようにしろ
白子屋　なんでお前ら、そんな仲良いんだ？・・・百姓代って良いご身分のお坊ちゃんだろ。それが、その
シケ　・・・お前たちは穢多と呼ぶ。人間じゃない
太郎右衛門　シケは人だ
シケ　太郎右衛門は変なんだ
太郎右衛門　はじめて会ったとき、まだ俺もシケも子どもだった頃から、人だった。何も変わらない。白子屋さんとも、何が違う
白子屋　ううん・・・？まあ、たしかに、顔も体も変わりはしねえが
太郎右衛門　同じなんだ。・・・俺たち二人で山神様を捕まえたときから、ずっと同じだ
白子屋　山神様
シケ　でっかい白い猪だ。八人の大人が手を回すほど太い太い桂の木のところに立っていた。それを太郎右衛門と俺で捕まえた
太郎右衛門　一晩中かかった
白子屋　ふうん、そう。雪隠行ってくるねー
シケ　あいつと喧嘩すれば死ぬってことを、俺たちの一族はみんな知ってる。当たり前だ。それなのに
太郎右衛門　俺は生きてた
シケ　たまたま俺がいたからだ
太郎右衛門　ひとりでも大丈夫だったさ
シケ　死んでた、絶対に
太郎右衛門　シケも一緒にな
シケ　そんなことない！

そこに白子屋戻ってきて

白子屋　いやああ
シケ　どうした
白子屋　いやあああ、俺が雪隠してたら、でっけえ、猪・・・！猪が俺のケツを見てやがる、いやあああ！！！
シケ　太郎右衛門！
太郎右衛門　・・・猪か・・・！
シケ　久しぶりの肉だ・・・！
太郎右衛門　・・・なるほど、食い物というのはこれほど大切か！
シケ　行くぞ！
太郎右衛門　久しぶりだな・・・！
白子屋　え、いや、待って～～

六場　星のような言葉

旧暦五月二十一日。江戸、下谷長者町二丁目・江戸の公事宿・白子屋文左衛門宅にて。決してきれいとは言えない宿。白子屋がまっさきにかけてくる

白子屋　うおおおおお！！数えきれねえ、人、人、人！隅田川に立派な橋、やっぱ江戸だなあ、江戸だよ、ようやく、ようやくついたぞ！！生きて、生きて帰ってこれた・・・！おい、おい、おーーい！太郎右衛門、シケ、ここが俺の宿だ

シケ　ボロボロだ

白子屋　うるせえ！文句があるなら別の宿に行け

太郎右衛門　ここに泊まらせてもらいます。シケ

白子屋　飯は朝夕、台所で出す。風呂はねえから銭湯に行け。宿代は一泊２４８文。悪いがびた一文負けられねえ。俺も生きるためだ。代わりに嘆願書を作る手伝いをしてやる。どうだ

太郎右衛門　よろしくおねがいします。旅銀はこちらに

白子屋　泥だらけの汚え銭だ。ありがたく頂戴する。紙も筆もそこにあるのを使え。腹減って死にそうだ。今、飯をつくる！ 今日は温かい床に休んで、明日ゆっくり書けばいい

太郎右衛門　いえ、村のことを思えば、少しも待ってはおられません・・・！村の者たちの泥だらけの手のひらが、きつく握られた拳に変わったその訳を。今すぐに書かせてください

白子屋　おう、好きにしな

太郎右衛門、その言葉にうなずき、筆を進める。

白子屋、書く姿と書きあがった訴状を見て、

白子屋　ここは公事宿（くじやど）。これまで、沢山の訴状を目にしてきた。しかしよォ、太郎右衛門さん、あんたのように、百姓から天下を案じた男はいなかった

太郎右衛門　ありがとうございます！

白子屋　目安箱にいれるつもりか？

太郎右衛門　はい

白子屋　一度では受け入れられねぇかもしれねぇぞ。何度でも、何度でも

太郎右衛門　もちろんです。・・・白子屋さん、もう一枚、文をしたためたく紙を

白子屋　何枚でも持ってきな

太郎右衛門　ありがとうございます

以下、太郎右衛門文をしたためながら。シケと話す

シケ　（黙って訴状を眺めている）

太郎右衛門　どうだ？
シケ　・・・わからん
太郎右衛門　わかりづらいか？
シケ　ちっともわからん
太郎右衛門　そうか・・・
シケ　太郎右衛門は悪くない。俺は文字が読めない
太郎右衛門　そうか
シケ　だが、太郎右衛門の文字は優しい、星みたいだ
太郎右衛門　星？星は優しいか？
シケ　ああ、優しい言葉を書いているのか？
太郎右衛門　どうだろう。激しい言葉かもしれない
シケ　激しくて、優しいのはやっぱり星みたいだ。・・・お前の言葉を、俺は忘れないようにしたい。だからこうして目で形を覚える
太郎右衛門　・・・シケ。頼みがある。この文を
シケ　俺は字は読めない
太郎右衛門　離縁状だ
シケ　りえん？
太郎右衛門　妻に渡してほしい。縁をきったこととする
シケ　・・・
太郎右衛門　村に帰ってこれを渡してほしい
シケ　どうして？
太郎右衛門　万が一のためだ。お上への直訴を行えば、私だけではなく、家族の命も危ない。それゆえの離縁状
シケ　・・・
太郎右衛門　家はわかるな
シケ　ああ
太郎右衛門　頼む
シケ　死ぬな、太郎右衛門
太郎右衛門　当たり前だ
シケ　お前が死んだら、俺は一人ぼっちだ
太郎右衛門　・・・江戸の街でも星が見えるな、シケ
シケ　もう少しお前の書いた言葉を見ていてもいいか。忘れたくない。せめて形で覚えていたい。ほしのあかりに照らして読もう
太郎右衛門　・・・ああ

太郎右衛門、シケに離縁状を渡す。シケ、黙ってそれを受け取る。

白子屋　どこ行くんだ、シケ
シケ　・・・佐原村に帰る
白子屋　おう、そうか
シケ　太郎右衛門は変な奴だ。こんな俺に、人間じゃない俺に、家族の命を託すと

いう

白子屋　お前だから頼んだんだろ。シケだから

シケ　なおさら変だ。・・・どうして太郎右衛門はこんなことをしているんだろう。本当はひとりで生きられるんだ、あいつは

白子屋　ひとりで生きられるヤツなんていやしねえ。あいつも、お前だって、そうだろ。あいつだって怖いんだろ

シケ　怖い・・・。そう、太郎右衛門だって本当は怖いんだ。託す手が震えていた。星を見る目がおびえていた。本当は怖いから、怖くないふりをしていたんだ。

白子屋　白子屋、

シケ　・・・おう、なんだ

白子屋　太郎右衛門を頼む

シケ　ああ、わかったよ

離縁状を受け取り走るシケ。舞台、反対側では太郎右衛門が目安箱へと直訴状を入れている。目安箱に祈る太郎右衛門

太郎右衛門　恐れながら書状を以てお願い申し上げます。大森御代官支配下三十五か村の百姓たちは、お江戸から遠い福島に生まれたばかりに、お江戸の方々の関心も、訴えをする力もなく、ただ苦しむばかり、死を待つばかりなこと、残念至極に思っております。もちろん、今の世はお上の御慈悲によって暮らせている御世（みよ）とわかっております。ただ、どうか我々の惨状を知っていただきたい。そうして、お慈悲の沙汰をいただきたい。田植えもできない地を荒れ果てておくこと、この御国にとっても、もったいないことでしょう。御公儀のお慈悲をもって、実情ご検分のご処置を。なにとぞ、お取り調べの上、お救いください

白子屋　シケがいるときは言えなかったが、俺は一文付け加えたほうがいいと思っている。決めるのはお前だが

太郎右衛門　・・・その方が良いと思っていました。この太郎右衛門はどのような罪をおおせつけられましょうともこれまでの寿命とぞんじ、妻子にいとまごいも告げず、村の誰にも知らせず、私一人の考えでこっそりと国元を忍び出て、お江戸に上がり、宿を取り、恐れながら目安箱に直訴いたしました。なにとぞ、お上の広大なお救いとなれば、ありがたき幸せにぞんじあげます。享保十四年閏五月　佐原村注進人　太郎右衛門

白子屋　下谷長者町二丁目　江戸宿　白子屋文左衛門

七場　見えざるものの裁き

旧暦六月十九日。佐原村太郎右衛門の家の前にシケが辿り着く。妻のコウに話しかける

シケ　誰かいるか
コウ　どちら様でしょう
シケ　太郎右衛門から文を預かってきた
コウ　中へ
シケ　いや、いい。俺はすぐに江戸にもどりたい。太郎右衛門のところへ戻りたい。これを
コウ　・・・（受け取ろうとしない）
シケ　どうした
コウ　離縁状でしょう。受け取れません
シケ　なぜだ
コウ　私は、私だけは最後まで太郎右衛門様のお側にいます
シケ　俺も味方だ。太郎右衛門の味方だ。太郎右衛門は、家族の命を救いたい。みんなの命を救いたい。受け取れ、なぜわからない
コウ　ひとりで抱えさせることはしません

そこに木南と吉田が現れて

木南　ここが、太郎右衛門の家だな
コウ　・・・ええ
木南　大森陣屋・手代筆頭木南浅野右衛門だ。お代官様より、太郎右衛門の家族を召し捕れとのこと。おとなしくお縄につけ！
シケ　待て！
木南　・・・人ならざるもの。お前がなぜ、ここにいる
シケ　太郎右衛門は何も悪いことをしていない！
木南　してる！
シケ　何をしたっていうんだ！
木南　それはあれだよ、お前、
吉田　木南様。木南様は、どうか役割を全うされてください。百姓たちの声をしっかりと書きと留め、お江戸に届ける
木南　ふん、手代筆頭としての、役割だからな！それが
吉田　そこの人ならざる者。答えはこうだ、太郎右衛門は、お代官様の言いつけを守らず陣屋に来なかった。
シケ　それはお前たちが悪い奴だからだ。太郎右衛門はこの村の人々を助けるために江戸に行ったんだ
吉田　何とでも言え。罪は罪。それゆえ、その罪びとの家族も召し取ることになった

シケ　待て！これは、太郎右衛門からの文だ。離縁状だ。この家族と、太郎右衛門はもう関係がない
吉田　これは興味深い。ついに妻子も捨てたか！
シケ　違う！
吉田　違わない。百姓たちは一様に言っているぞ。お代官様は良い代官。太郎右衛門は、嘘つきなのだと。
シケ　誰がそんなことを！
吉田　みんなだ。なあ、太郎右衛門の嫁よ。お前はよく知っているだろう。村の中で、どんな目にあっているか教えてやればいい
シケ　どうしてそんなことを
コウ　・・・あなたたちお侍さん達が村人たちの命を、米で買ったからです。あなた達のなんの誇りも無いその生き方を、よくよく知っています。・・・太郎右衛門様はこの村の、その日生きることで精いっぱいだった村人々の、ほんの僅かに残された勇気を集めて江戸に登りました。この村を救うために
吉田　ははは、なんとでも言え。信じていた男に捨てられた女が

コウ、シケから離縁状を奪い取り、破く

コウ　どうぞ、捕らえなさい。奥に子もおります
吉田　木南様、その女を
木南　ああ

奥に向かう吉田。木南に捕らえられるコウ

シケ　（木南に）やめろ！！
木南　ひいっ！
コウ　（シケに）やめなさい！
シケ　どうして！
コウ　太郎右衛門の妻であり、子であることを誇り、死にます。
シケ　死ぬなんて言うな、俺は太郎右衛門に頼まれたんだ！お前たちを！
コウ　お願いします
シケ　どうしてそんなことを願うんだ・・・。なあさっきの話は本当か？村人たちが米で太郎右衛門を売ったのは
コウ　ええ
シケ　許せない！
コウ　私も許せません。今すぐに、この手で、この村の人たちを殺してしまいたい。ですが、それはなりません。太郎右衛門様を裏切ることになります。太郎右衛門様ならば、それでもなお、人を信じる

吉田、奥から熊蔵を連れてきて

吉田　おりました
コウ　私が連れて行きます
木南　行くぞ
コウ　・・・ひとつだけ。お名前は？
シケ　・・・シケだ
コウ　シケさん。あなたを生かしたかったから、太郎右衛門様は、あなたをここに遣わせたのです。そういう方なのです

コウ、吉田、木南はける。シケ、ちぎれて散らばった離縁状を手で集めて、文字の形を見る。シケ、何かを決心した様子で退場。

所は変わり江戸・南町奉行所。太郎右衛門が沙汰を待っている。以下、評定所の裁判は、寺社奉行、町奉行、勘定奉行が吟味を行うが、すべての人物は影のみで姿を見せない。

寺社奉行　本日の主任奉行は、寺社奉行の竹田元延である

ひれふす太郎右衛門

寺社奉行　佐藤太郎右衛門
太郎右衛門　ご沙汰が下るこの日を待ち望んでおりました
寺社奉行　目安箱への直訴状、目を通させてもらった
太郎右衛門　ありがとうございます！
寺社奉行　問う。なぜ、村の者どもはお主を直訴の頭とした
太郎右衛門　直訴は私ひとりの意思。村の者どもには何の罪もありません
町奉行　直訴の言葉、まさに見事
勘定奉行　だが果たして信じていいものか
太郎右衛門　お奉行様方、嘘偽りはございません
寺社奉行　しかし、偽りと言う者がいる。前へ出よ

という奉行の声に促され、岡田が現れる

岡田　大森代官・岡田庄太夫、これに！！
太郎右衛門　お代官様
岡田　やあやあ、佐藤太郎右衛門くん！江戸でお会いするとは
太郎右衛門　お奉行様、これはいったい
寺社奉行　問う。おぬしの直訴によれば、信夫の地は、長雨続きで不作と申した
太郎右衛門　その通りです。これは信夫ではなく、日の本中が、そのように
寺社奉行　岡田、間違いないか
岡田　間違いありません
寺社奉行　岡田庄太夫。それにもかかわらず年貢を厳しく取り立てたというのは真か

岡田　お上に納める米に不足があってはならない
寺社奉行　それはまた尤も。されど、民百姓があっての政よ
岡田　それは重々承知。ですから、自分の米蔵から米を民百姓に与え生き長らてもらおうと
太郎右衛門　なに！？
岡田　それにもかかわらず、その男は
太郎右衛門　お奉行様、その男は、老人・子供は役にも立たぬから死んでもいいと！　百姓は藁にぬかを混ぜたものを食えと

ざわめく奉行達

岡田　そんなことは申しておりません。どこにそんな証拠がありますか
寺社奉行　太郎右衛門
太郎右衛門　この耳が確かに！
岡田　耳！　耳が証拠に！はははは！ならば、その耳、今ここで切り落として、中を調べてみますか？ははははは！
太郎右衛門　それで真と信じるなれば
町奉行　ははは！面白い、させてみよう
寺社奉行　良い良い。そのようなことは。岡田に問う。村の者たちは、文字も書けぬものばかりか。
岡田　その通りでございます。それをその男は・・・。少し学があるのをいいことに、それを鼻にかけ百姓たちを、騙した大ほら吹き。凶作にあえぐ村から、妻子すら見捨てて！路銀を奪い江戸物見に使う、とんでもない野郎です！
太郎右衛門　村の者に聞いていただければわかるはずです
岡田　ならば村の者どもに聞いてみてください、お奉行様。嘘偽りは申しておりませんぞ？申しておりませんぞ？
寺社奉行　勘定奉行
勘定奉行　村の者どもはこのように。お代官様は食うものもない俺たちに自分が持つ米を分けてくださったと
寺社奉行　太郎右衛門のことは
勘定奉行　俺たちを騙し、路銀を奪った悪人だと
町奉行　おやおや、これはこれは
太郎右衛門　あやまりでございます！あやまりでございます…！！
町奉行　むごい、むごい、なんとむごい！こんな時間をとることすら、無意味
岡田　ははははは！　ざまあみろ、太郎右衛門よ！大ほら吹きものが！！　ははは
寺社奉行　静粛に
岡田　これはこれは・・・大変失礼しました・・・それでは、お奉行様！！この男に、佐藤太郎右衛門に！！ご沙汰を！！
太郎右衛門　・・・
寺社奉行　気になることはあった。太郎右衛門、おぬしの妻は最後まで信じておったそ

うだ。
太郎右衛門　・・・
岡田　それは身内びいき
寺社奉行　それともう一つ。人ならぬ身のモノが、お前のことを必死に話していた。百姓たちは、代官に米で買われたのだと言っていると、そういう報せはあったようです
岡田　そんな報せをあげるのはどこのどいつだ！
寺社奉行　勘定奉行、誰からであったか？
勘定奉行　大森陣屋・手代筆頭の木南
寺社奉行　お主の家来だな
岡田　・・・あの者は無能です。言われたままを書き留める
寺社奉行　それがお役目だ。すべてあるがままに残しておく。素晴らしい仕事ぶりだ
岡田　人ならざるものの言葉など、信ずるに値しませんでしょう。お奉行様方！！
寺社奉行　・・・実は、おぬしに、佐原の村の者から届け物があるのだ
岡田　届けもの！ なんですかな、嬉しいことですな！！ 気をまわして、このような！江戸まで！！ いやはや、太郎右衛門には、死を届ける言葉だけ！ 私には、何が届いているのですかな。はは、ははははは！！！

奉行が指示すると岡田の元に大量の米俵が届けられる

町奉行　米？
勘定奉行　米俵だ
町奉行　何故、米が？
寺社奉行　岡田に問う。この米俵は何するものぞ
岡田　お奉行様方への百姓たちからの
寺社奉行　賄賂など受け取れん
岡田　私が江戸で信夫の飯を食えるようにと、なんと愛されているか！
勘定奉行　先程、百姓たちは米で買われたと
太郎右衛門　お奉行様方。恐れながら申し上げます。この米は、文字を持たぬ百姓からの必死の言葉です
岡田　黙れ、聞く耳などいりませんぞ
寺社奉行　太郎右衛門、続けよ
岡田　きっとその太郎右衛門が私を陥れるために！！
寺社奉行　岡田！・・・太郎右衛門続けよ
太郎右衛門　飢饉にあえぐ、明日餓死するかもしれない百姓たちがこれほどの米を手放すでしょうか？ お代官様に、送り返すことが言葉となりましょう
勘定奉行　・・・手放すだろうか？
町奉行　さあ、どうだろうか
勘定奉行　こんな僅かの米が抵抗になるか？
町奉行　なるとは思えぬ。この程度の米を、手放すことなどで
勘定奉行　寺社奉行。今回の裁きと、この米、関係があるのですかな？

寺社奉行　割れたときは多数決です。町奉行、勘定奉行は、気にせずとも良いと。それならば、2対1、気にすることではないでしょう。

岡田　・・・さてさて。御奉行様方。もともと、今回の罪は太郎右衛門たち百姓どもが強訴をしたことだ。そのせいで、我々大森代官も、隣の福島藩も甚だ迷惑をこうむり、業務が止まってしまった。もし、仮にだ、太郎右衛門が言うように、この岡田にも不徳のなすところがあったとしてもだ。・・・それはこの評定にはなんの関係もない！

町奉行　そのとおり。

勘定奉行　寺社奉行。この評定はいたく簡単

町奉行　決まっておることでしょう。早く、評定を決めてしまいましょう

寺社奉行　・・・そうですな。それでは・・・

奉行達　三奉行の合議によって、評定所に於いて申し渡す。奥州信夫伊達両郡村々の強訴致し候　百姓御仕置。一、岡田庄田太夫御代官所　信夫伊達両群の内、五十四ヵ村の百姓、食料、種籾、年貢の減額という願いを、大勢徒党をもって、御代官陣屋に押し込み、私領福島藩城下へまで、強訴いたし、御公儀をはばからせざるは重罪なり。死罪獄門・立子山村　小左衛門、忠次郎。遠島流罪（えんとうるざい）・関谷村　百姓　惣左衛門、下水原村　太兵衛・・・

（と罪状と百姓の名前が呼ばれていく）

あさ　おかえりなさい、旦那様

岡田　・・・肝を冷やした

あさ　あら、珍しいこともありますね

岡田　・・・常に民をあつかうさまよからぬ故に、かかる騒擾（そうじょう）を引き出せり。この後、かかる事なからんようはかろうべし

あさ　怒られたのですね

岡田　・・・あさ。過ちなどあろうか

あさ　ええ、それは代官所のみなさんが間違っています！旦那様のやることはいつも正しいのですから

岡田　正しいか

あさ　ええ、そうでしょう？よくお話されていました。旦那様の尊敬するお父上様は清廉潔白の人だったと。賄賂が蔓延（はびこ）る世でも、真っ当にお仕事をされていたと

岡田　・・・ああ

あさ　あなたの父はそういう人だと、子ども達にも伝えていますよ。いくら人々に嫌われようと間違ったことはしていないと

岡田　・・・ひどい世だ

あさ　ひどい？

岡田　お上の元でひとつにまとまらなければ。なあ、あさ

あさ　はい

奉行達の声が大きくなる

奉行達　・・・重々不届きに付き　江戸近辺奥州御構（おかまい）　追放　信夫郡佐原村　太郎右衛門

太郎右衛門　追放！なぜ、追放なのか！

白子屋　・・・八十九名もやられちまったか。信太の名前もある。五十日、戸〆（とじめ）だそうだ

太郎右衛門　立子山の二人は疣石（いぼいし）峠で死罪獄門。俺は、追放・・・？

白子屋　佐原の奴らが、シケたちが、お前の命を救ったんだろう

太郎右衛門　これで帰ることなどできません。なにも果たしてはおりません。白子屋さん

白子屋　・・・銭はあるのか

太郎右衛門　それは

白子屋　宿賃が足りねえ。・・・村から送ってもらえるように頼んでくれねえか。助けてやりてえが、こっちも生きなきゃならねえ。すまねえ

太郎右衛門　・・・はい

白子屋　直訴し続けるのか

太郎右衛門　もはやそれしか道は残っておりません。何度でも何度でも。お上に届けば必ずや・・・必ずや・・・

来る日も来る日も直訴状を出す太郎右衛門

十二月、太郎右衛門を囲む捕物達。捕まり手錠をかけられた白子屋も来ている

捕物　その男で間違いないな

白子屋　・・・ええ、そうです

捕物　佐藤太郎右衛門だな。江戸追放の身ながら、度々の箱訴、覚悟は出来ているのであろうな！

太郎右衛門　お上は、お上は読んでくださっているのでしょうか。この国の惨状を！

捕物　おとなしく捕まれ！！

抵抗なく捕まる太郎右衛門。そこに岡田がやってきて

太郎右衛門　お代官様

岡田　・・・大森陣屋に運べ！

白子屋　おう・・・。太郎右衛門。生きろよ

岡田　バカが。死ぬんだよ。これからこの男は！！御公儀の言いつけを守らなかった罪人だからな

白子屋　人はよ、そう簡単には死なねえよ。なあ、太郎右衛門

太郎右衛門　白子屋。巻き込んで悪かった

白子屋　バカ言え・・・宿賃、しっかり払いやがれ

太郎右衛門　・・・シケに届けさせるか

白子屋　おう、待ってるぞ。じゃあな
太郎右衛門　最後に信夫の地を踏めるなど、なんと嬉しいことか！！お代官様の御慈悲に感謝いたします！
岡田　連れて行け！！

暗転

八場　思わざらまし六つの花

享保十五年旧暦一月二十一日。佐原荒田口。太郎右衛門は、大森陣屋にて死罪獄門を申し渡される。この日の処刑は、二日前になり突然村人たちに準備を仰せ付けられている。「この御仕置、十九日に急に仰せ付けられ候故、佐原名主、組頭、百姓は二十一日まで二夜三日ねむりもせず、知らざる事ゆえ大苦労仕り候。（根元記）」
舞台上、村人たちの手によって粛々と準備が進められている。獄門台が建てられる。

吉田　百姓ども。処刑の準備は終わったか
斉吉　あとはこの獄門台に五寸釘をうつだけです
吉田　処刑する穢多は決まったか
斉吉　はい
信太　おう、その釘、俺にうたせてくれ

信太が五寸釘を打ち込む音。

斉吉　雪、降りそうですね
信太　この釘に差し込むんだろ、太郎右衛門の首を
吉田　ああ、そうだ
信太　・・・寒いな

木南によって連れてこられる太郎右衛門。百姓たちが見ている。舞台中央にシケが処刑用の刀を手に持ち立つ。村人たちは皆、口を閉ざしている。
そこに岡田がやってきて

岡田　見に来てやったぞ、太郎右衛門

百姓たち、足音を立てて、岡田に近づく

岡田　お前たちもこの男のようになりたいか！

百姓たち、無言でじっと岡田を見つめる

岡田　お前たちがこの場を準備したんだ、この男を殺すための！忘れるな！木南、吉田、あとは任せる

岡田はける

信太　・・・お侍様！ 俺を、俺を太郎右衛門の代わりに殺してくれ

シケ　本当は死ぬ気などないのだろう。そうやって格好をつけているだけなのだろう！

信太　俺が太郎右衛門に命じたのだ！！

シケ　じゃあ、お前が代わりに死ぬか！！

信太　ああ

シケ　お前たちは、太郎右衛門の代わりになれたんだ。それなのに・・・。お前たちが行けば良かった！

太郎右衛門　・・・シケ。お前が星のようだと言ってくれた言葉は、私しか書けない。だから、登ったのだ。想いは皆同じ

シケ　俺が！！ 俺が人ならば！

太郎右衛門　シケ、お前で良かった。よく切ってくれ

シケ　・・・

コウ　皆さま、ありがとうございます。しかし、これ以上は何人たりとも話しますな。太郎右衛門様が、お辛うなります。・・・お役人様、暇乞いの酒をお許しいただけますか？

吉田　そのようなことは前例がない。早くやれ

木南　良い

吉田　木南様

木南　良い、

吉田　なんの気まぐれか

木南　吉田。今、ここを預かるのはこの木南だ

吉田　そうですが、

木南　許す

コウ　ありがとうございます

太郎右衛門　・・・コウ、熊蔵のこと、頼む

コウ　はい

太郎右衛門　・・・うん。・・・皆も某があとをお頼み申す。・・・シケ。最後の言葉だ。とどめていて欲しい

雪が降りだす。コウ、太郎右衛門に最後の酒を呑ませる。太郎右衛門それを凛と受け

太郎右衛門　人のため登る我が身のうれしさに
思いしれかし　信夫人々
人のため死する我が身の命かな
うらみとさらに思わざらまし

再び騒ぎ出す百姓たち。太郎右衛門、もう一度辞世の歌を先程よりも大きな声で詠む。シケ、その言葉を必死に覚えようとしてつぶやいている

太郎右衛門　人のため登る我が身のうれしさに
思いしれかし　信夫人々
人のため死する我が身の命かな
うらみとさらに思わざらまし

シケ、処刑のための刀を握る。雪が強くなる。太郎右衛門の処刑が行われる。
シケ、一太刀で斬ることが出来ない

木南　何をしている、一太刀で斬り落とせ
シケ　・・・・！

シケ、何度目かで、ようやく首を落とす

数日後。信太、斉吉、梅来る

信太　・・・雪、雪、雪
斉吉　寒いから、腐らねえんだそうです。太郎右衛門さんの首
信太　そうか
斉吉　なにか変わるんですか？これで
信太　変えなきゃならねえ
斉吉　はい
梅　・・・（コウの姿を見つけ）コウさん
信太　今はそっとしてやれ
梅　・・・はい

百姓たちはける

コウ　うらみとさらに思わざらまし。・・・シケさん、いますか？雪、雪、雪。姿は見せないけれど、太郎右衛門さんの側にいてくれてたでしょ。明日でさらし首もおしまい。・・・真っ白な雪の上に、太郎右衛門さまの血がぱっと散った。まるで赤い花が咲いたようだった。その上に、また雪。太郎右衛門さまが教えてくれました。雪のことを六つの花と言うのだそう。六つの花・・・。手

に落ちた雪を近くでよく見てみると、本当だ、六つの花びらの花のように見える。ああ・・・太郎右衛門様が花に包まれていくのだと思っていました。ねえ、シケさん。うらみとさらに思わざらまし・・・。思わざらまし・・・。雪の花は、桜に変わる。あの人はいないけれど、必ず春が来る。

白い雪は次第に、桜の花びらに変わる。舞台上、百姓たちがその桜を見上げている。去ろうとするコウを、梅が呼び止め、一緒に桜を見る。そこに買われていた娘・しま来る。しま、斉吉になにか話している様子。斉吉、はじめて心から太郎右衛門に祈る。降る花びらは、慈徳寺の種まき桜である。白子屋が入ってくる

白子屋　見事な桜だな
斉吉　あんたは
白子屋　太郎右衛門は、死んだか
コウ　はい

信太来る

信太　太郎右衛門様の血で染まった雪も溶けて水となり、今度はこうして田畑を潤してる
白子屋　おう、元気だったか
信太　久しぶりだな
斉吉　どうでしたか！
信太　新しい殿さまが決まった。二本松の丹羽（にわ）様だ
梅　丹羽さま！
白子屋　おお、殿様変わるのか
信太　岡田の野郎に手を貸してたのは許せねえが、年貢は軽くなる
斉吉　本当か！
信太　ああ！田畑の様子を見に来られて決められるそうだ。約束してくださった
梅　太郎右衛門様のおかげです
しま　うん、太郎右衛門様の
白子屋　様、か
信太　ああ。太郎右衛門様だ
白子屋　・・・変わるのかもしれねえな。太郎右衛門みたいな奴が、お前らみたいな百姓が国中に溢れたら、お上だって食う米が無くなるかもしれねえ
斉吉　そんなことあるんですか？
白子屋　さあなあ。江戸にいるのも飽きちまった。ワッチはここに住むことにする。良いだろ？太郎右衛門の守った村によ。・・・田にうつる青空、蝉の声。風の玉通り抜け、揺れる稲穂。吾妻からおりる雪。・・・どんなことがあろうと、季節はめぐり、月日は流れるもんだ、なあ、太郎右衛門

九場　語り継がれる信達義民

太郎右衛門の処刑から二〇年後。寛延三年、秋の暮れ。立子山（たつごやま）のいぼ石峠にて。若い雲水の本端が何やら拝んでいる。かさを深くかぶり、錫杖を持っている。そこにシケがあられる。シケは太郎右衛門処刑のあと、この立子山に移り住んでいる

シケ　誰だ

本端　！　決して怪しい者ではありません

シケ　どこのものだ

本端　ここから三里ほど西にある、佐原村からまいりました、本端と申します

シケ　佐原

本端　あの吾妻山のふもとのあたりです

シケ　・・・よく知っている。俺も昔はあそこに住んでいた

本端　ああ、そうでしたか

シケ　この山に何をしに来た

本端　このあたりで、死罪になられた小左衛門さまと、忠次郎さまの御供用をと思い

シケ　誰だそれは

本端　数年前、このあたり一帯に飢饉が起きたとき、その身を賭して百姓たちのために戦ったお方です。・・・いえ、私の父も、同じ頃、同じように百姓がためにその命をかけ死罪となり

シケ　太郎右衛門の子か

本端　ああ、そうか・・・。太郎右衛門の末子、熊蔵です

シケ　太郎右衛門の・・・

本端　父が亡くなったときの記憶はほとんど残っておりません。雪が降っていたことは覚えております

シケ　寒い日だった

本端　罪人の息子ですが、食うものに困ることはありませんでした。村の人たちがとても良くしてくれました。・・・父はどんな人でしたか？

シケ　・・・

本端　村の人たちは誰も父のことを教えてくれませんでした

シケ　吾妻の夕焼けは美しい。ちょうど、佐原のあたりにおりてくる。暗くなると獣も多い。気を付けろ

そういってシケはける。本端、この地で死んだ義民のために合掌。しばらくして、笠と錫杖をもって立ち上がり、夕焼けに沈む吾妻山に向かい叫ぶ

本端　父上！！父上・・・！父上！！

シケ　・・・太郎右衛門の子
本端　これは、お恥ずかしいところを
シケ　すまない、すまない
本瑞　・・・
シケ　俺がお前の父親を殺した
本端　・・・シケさんですね
シケ　俺が、この手で
本端　母が最後まで信じてくれた人だと
シケ　生きてしまった。生きてきてしまった。今まで
本端　生かしたかったのです。父は、あなたを
シケ　・・・
本端　今となってはその理由はわかりませんが、きっとそうなのです
シケ　・・・俺に文字を教えてくれないか
本端　文字を
シケ　頼む。俺は、太郎右衛門の直訴状の文字の形を音を覚えている
本端　直訴状を
シケ　だが俺の頭の中だけだ。それでは、残らない。太郎右衛門の想いは消えてしまうかもしれない
本端　・・・父は、直訴状を出したことで打ち首となりました
シケ　そうだな
本端　その文字を、再び書き起こすこともまた、罪と問われるやもしれません
シケ　そうか
本端　・・・だが、覚悟しましょう。父が何を案じたのか、ずっと知りたかった。私でよければ。形と、音から文字を起こす。並大抵なことではありませんが

二人が勉学に励んでいるところに割って入るように 白子屋が現れて

白子屋　おうおうおうおう、毎夜毎夜、夜中まで灯りがついている。本端さん、一体何をしてるんで？
本端　いえ、勉学に励んでおります。まだまだ未熟な身故
白子屋　その書いてあるモン、見せてくだせェ
本端　これは
シケ　俺が、文字を教わっている
白子屋　シケ・・・！
シケ　太郎右衛門の直訴状をもう一度書き起こす
白子屋　そりゃ、罪じゃねえのか！？おいおいおいおいお、やめ　るつもりはねえのか、和尚さん
本端　ええ
白子屋　なら、こっちも考えがある。なぁ！

一斉に現れる百姓たち

信太　俺たちにも、文字を教えてくれ

しま　お願いします

本端　・・・！

斉吉　シケさん、太郎右衛門さんの訴状の言葉を、教えてくれ

百姓たち、口々に本端、シケにお願いしますと頼む

本端　よろしい、それではー

コウ　太郎右衛門さまが江戸の公方様に差し出した直訴状。命を賭して紡いだ言葉は、佐原の村人たちの手によって、密かに書き残されました。春の桜、夏の風、秋の稲穂に、冬の吾妻。季節移ろい、時流れ、文字を書いた墨掠れれば、また次の時代の者が書き残していきました

舞台上、シケのような人物が直訴状を手にしている。男、歩き出す。舞台は江戸から現代へと移っていく。中央に現代の服を着た男が立っている。その男の顔は、どこか太郎右衛門に似ている。シケのような人物、その現代の男に直訴状を託す。男、歩き出す。男の先には、学生服姿の三人の若者が待っている。劇終